別紙様式３（第３条関係）

論　文　要　旨

氏　名　　申　福貞

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

1930・40 年代日本語文学と「境界」の表象
－東アジアを視座として－

論文要旨（別様に記載すること）

（注）１．論文要旨は、A4 版とする。
２．和文の場合は、４０００字から８０００字程度、外国語の場合は、２０００語から４０００語程度とする。
３．「論文要旨」は、フロッピーディスク（１枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

論文要旨

本論文は、一九三〇・四〇年代における日本語文学と「境界」の表象について、日本、中国、台湾などといった地域を中心に、統合と二項対立という視点から、東アジアと接点をもつ太宰治、檀一雄、中村地平のアジア体験をもとに考察したものである。

先ず、序章（一九三〇・四〇年代日本文学における「境界」）では、研究の背景と視点、そして一九三〇・四〇年代における「境界」の構図と研究方法について検討した。

明治維新以後、日本は地理的空間を跨ぎ越え、西洋列強の仲間入りを果たそうとしながら、連帯／侵略を繰り返し、アジアとの接点を持ち続けてきた。「文明」の「西洋」と「野蛮」な「東洋」、このような二項対立の図式的な認識によって日本は、「脱亜入欧」をめざしながら、他者としての西洋を強く意識しつつ、同じ文明圏のアジアをもう一つの他者として自己と差異化していたのである。本論で東アジアを視座とするのは、支配と服従という垂直関係を維持しつつ、連帯／侵略の構図をもっともよくあらわした磁場として東アジアが存在していたからである。そして十五年戦争が続いていた一九三〇・四〇年代は、日本と東アジアのそのような幾層の関係がもっとも顕著に再現された時期である。アジア諸国との摩擦や抗争に直面し、それらの緩和と調停の必要性から打ち出された大東亜共栄圏は、連帯／侵略の「境界」を抹殺し、その内部から発生するあらゆる差異を覆い隠すことになる。戦時下の日本において「内」／「外」や「自」／「他」の再構成という意味での＜「境界」の制作＞の問題が、本格的に取り込まれていたのはまさに一九三〇年代であったが、「境界」をめぐる問題が対外においては、アジアへの両義性をはらみつつあった植民地政策と深く結びつけられ、国内においては、対外とのかかわりの中で二項対立の概念を内包しながら現前化されていたのであった。

「満洲事変」以後、プロレタリア文学者による転向と、「日本主義」と呼ばれる国粋主義の傾向が高まっている中、「故郷」と「異郷」、「中心」と「周縁」、「内地」と「外地」、「文明」と「野蛮」など、当時において様々な二項対立の上下価値を付与された概念が、言論活動や思想のレベルで強化されつつあった。これらの二項対立概念は、決して一九三〇年代に特有なものでなく、明治時代の日本の近代化とともに生み出されていたものである。しかし、一九三〇・四〇年代において大東亜共栄圏の理念や「伝統」への回帰といった昂揚する帰属意識の下で、二項対立をめぐる問題が改めて浮かびあがり強化され、再生産されていたのであった。

このような社会の動向を踏まえながら、本論文では、これまでの研究の流れを基盤として、一九三〇・四〇年代における「境界」という概念から考察可能な、典型的な作家として、太宰治、檀一雄、中村地平を取り上げる。戦時下の言説空間において広く流布していたのが二項対立をめぐる問題であるが、この幅広い射程を一つに纏めあげる可能性を持つ分析上の概念が「境界」の概念であると考える。しかし、この「境界」という概念はきわめて多義性をもっている概念であることは言うまでもない。本論文では、「境界」という視

点から、戦時下の言説空間における「場」と「時」、言語問題等を中心に「帝国」の「外」と「内」にあらわれた「境界」の表象について、「伝統」／「近代」、「故郷」／「異郷」、「内地」／「外地」、「中央」／「周辺」、「母語」／「非母語」、「日本語」／「非日本語」などの観点から分析する。

第一章（「故郷」の表象と「満洲」― 檀一雄と「満洲」放浪）では、檀自身の「満洲」地域での数度に亘る放浪と移住の経験と密接な関連を持っている「樹々に匐う魚」と「裾野少女」を取り上げ、両小説中に描かれる富士に象徴されるような「故郷」の表象が、一方で「満洲」という空間と対比的に構築されていることを、社会的文脈を踏まえながら解釈した。

「樹々に匐う魚」では、富士に「故郷」が象徴され、あきはその「故郷」にあこがれているが、しかしその思いとはずれている「故郷」が提示されている。一方で、「裾野少女」のあきは、「故郷」である富士を離れ、異郷である阿蘇に生きていく場を見出そうとする。伝統の象徴でもある富士（「中心」）から「周辺」の阿蘇へ向かうあきの旅は、「周辺」から「中心」に向かう流れに逆行するものでもある。「裾野少女」では、「故郷」を離れていくあきの旅と、「満洲」に行ってから音信不通になった唐島の「廃郷の旅」によって、伝統的「故郷」が相対化され、「故郷の喪失」が示されている。このように両作品は、「故郷」を喚起するもの―「故郷」の「伝統」と「喪失」の問題―として、対になっている作品として位置づけられる

「南方」と深いかかわりを持つ中村地平については、まず、第二章（「越境」するトポス―中村地平における「内地」／「外地」の表象）で、作家自身の創作活動の源とも言われる「南方」へのあこがれと、四年間の植民地台湾での留学生活を結び付けながら、「旅さきにて」と「土龍どんもぽっくり」を取り上げ、中村地平における「内地」／「外地」の表象について考察した。

「旅さきにて」には、「南方」の表象として初夏の爽やかな「内地」の田園風景が描かれている一方、後半には晩秋の薄暗い植民地台湾が対照的に描かれている。「内地」の生活に浪漫を感じていたお俊さんの植民地台湾でのあの世への「旅」は、生命力を感じさせる「内地」の田園風景への憧れと、異質な「外地」の都市空間に対する否定を際立たせるものである。「土龍どんもぽっくり」は、伝吉夫婦の生活の中で、「都会」と「地方」、「文明」と「野蛮」といった二項対立の問題を内包しながら、＜父＞の不在を通じて＜正し＞さとは何かという問題を問いかけている。「土龍どんもぽっくり」に描かれた進歩的、合理的なものへの否定による＜正し＞さへの問いかけは、「旅さきにて」のお俊さんの死への問いかけと重なる問題でもある。お俊さんが台湾に渡ったのは＜海外雄飛＞の夢を追う夫について行ったものである。アジア解放と進歩主義を掲げた＜海外雄飛＞の背後には、「内地」の行き詰まりという「内地」の現実が隠されている。『旅さきにて』の両作品において中村地平の「外地」から「内地」へ、さらに「内地」の南への視点の動きは、近代的進歩主義への違和感を内包するものであり、一方は悲劇的に、一方は喜劇的に描かれているのは、まさ

に近代進歩主義、拡張主義へのアンチテーゼと基盤を同じくするものでもある。『旅さきにて』には、「外地」と「内地」の対比によってあらわれた近代的進歩主義へのアンチテーゼが、「内地」が内包する問題と重ね合わせられてあらわれているのである。

第三章（「南方」への憧憬と「ふるさと」―中村地平と「南方」という空間）では、風土と文学を結びつける中村地平の「南方的文学」理念を最も顕著にあらわした「南方郵信」と『日向』の二作品を取り上げ、中村地平における「南方」の意味と、「南方」のもつ二律背反の性格について分析した。

両作品においては、日向の人々の「牧歌」的生活が、「南方」の風土のもつ特徴によるものであることが強調されつつ、〈悠久な自然〉の中で、単調で、変化のない日向の百姓たちの暮らしが、あたかも時代から遊離しているかのように描かれている。しかし、「南方郵信」で描かれた村人たちの強い排他的意識や、音楽隊の音に脚なみを揃えて行進する小学生たちなどは、日本の世相を裏返しに示しているものであり、地域の共同体の中まで国家的スローガンが浸透していることを裏づけるものでもある。一方、源吉爺さんの死を通じて、氏神でも「英霊」でもない魂が自由にさまよう空間として「南方」が描かれ、排他的、国家的束縛が存在する「南方」という空間が、解放と救いのある空間として描かれている。「牧歌」的だった「南方」のある村が、脱政治的な空間でありつつ、方法的に描かれ、時代の情勢に回収されないような「南方」的共同体が、日本の縮図として描かれている。このような「南方」のもつ二律背反の性格は、時代的言説を内包しながら、それに拮抗する非時代的言説の中で＜政治的な文化的な＞要素が排除された日向を描いた『日向』にも通じるものである。

太宰治に関しては、何れも敗戦直前に書かれた『津軽』と『惜別』（発表は昭和二〇年九月）を取り上げ、「外地」の経験をもたない「内地」の作家の空間認識及び言葉の問題などを通じて「境界」の表象について考察した。

まず、第四章（「越境」する旅―太宰治『津軽』を視座として）では、チェーホフの『シベリヤの旅』が『津軽』に与えた影響に注目し、両作品の形態上の類似性や作家の時代に対する認識について分析を行った。『シベリヤの旅』に描かれたチェーホフの旅は、中央のモスクワからシベリヤへ向かう（地方）旅であり、またヨーロッパからアジアへの旅でもある。そこには、「文明」と「野蛮」に対する作家自身の眼差しが、ヨーロッパの文明国より遅れて近代化を進めてきたロシアの、ヨーロッパと近隣の中央アジア諸国への眼差しとは異なるものとして提示されている。『津軽』では、「私」の故郷への旅が、「満洲」を想起させるものとして描かれており、故郷を語ることによって「満洲」が相対化され、「私」の故郷である津軽（地方）と日本（中央）、そして「内」（日本）と「外」（アジア）の構図が、「私」の故郷への旅によって語られている。ともに小山書店の依頼を受けて、同じ時期に新風土記叢書として出版された太宰治の『津軽』と中村地平の『日向』は、それぞれ日本の「北」と「南」に向かって「中央」に距離を置きながら自らの故郷について語っていたが、時代に乗り遅れる人々を描いたという点においては通じるものがある。

第五章（「内地」の彼方へ－太宰治『惜別』論）では、当時の周作人の日本文壇との関わりや、周作人の文章と『惜別』の内容を分析し、これまで論じられることのなかった『瓜豆集』と『惜別』との関連性を明らかにした。それと同時に周作人を、周さんを描くための補助線として引いていた太宰のねらいと、〈日本語不自由組〉という語のもつ意味あいを分析することによって、戦時下の太宰治の作家としてのスタンスとアジア認識について分析した。

太宰治が『惜別』を書く際に竹内好から『魯迅』を贈呈されたのは周知のとおりであるが、『魯迅』の中で竹内好は、周作人の作品集『瓜豆集』に収録された「魯迅に関して」を引用している。『惜別』には、『瓜豆集』に収録されている「東京を懐ふ」との深い関連性が見られる。とりわけ日中の日常生活習慣と文化を比較しながら語る周さんの姿には、魯迅の実の弟である周作人の姿が投影されている。また、『惜別』の周さんのキリスト教や、儒教の〈礼〉に関する発言には、「五・四」時期の周作人の文壇での動きと伝統文化に対する理解が色濃くあらわれている。周知のように周作人が日本の伝統文化に興味をもち、多く語っていたのは三〇年代のことであり、その語りはつねに〈自己譴責〉を伴うものである。太宰は、中国近代文学の先駆者である魯迅を、その弟の周作人を補助線として描き、「他者」（アジア）という〈鏡〉に映る「自己」（日本）像を浮かびあがらせたのである。「他者」という〈鏡〉によって映し出された「自己」（日本）像が、〈他者〉の〈他者性〉を失った、まさに戦時下の日本そのものであることを、太宰は『惜別』を通じて語っている。その〈他者性〉の喪失が、地理的、文化的な「境界」を越えた統合と暴力によるものである事はいうまでもない。そもそも太宰が〈日本語不自由組〉という言葉を用いたとき、そこには、「国民」と「非国民」、そして「内」と「外」における「日本人」という「境界」の問題が、帝国の「内」と「外」に同時に発生しているという現状に対する太宰の認識がうかがえる。周さんの帰国によって〈日本語不自由組〉は解散されるが、〈日本語不自由組〉の解散は、〈私たち〉の間に結ばれた〈連帯〉の破断を意味しており、その破断は、あたかも大東亜共栄圏によるアジアの〈連帯〉の破断という歴史的な出来事を先取りするかのように、敗戦によって日本の〈親和〉の物語は終焉を迎えたのであった。『惜別』と同じ時期に書かれた『津軽』の結末の〈絶望するな〉という「私」の読者への呼びかけは、まさにこのような日本の運命を象徴するかのように語られている。『惜別』は、太宰治の中国、あるいはアジア認識を考える上で重要な意味をもつ作品として位置付けられるのである。

本論文で考察の対象となった太宰治、檀一雄、中村地平、これらの作家たちは、一方では、「境界」のもつ図式を共有しながら、他方では、それを相対化し、大東亜共栄圏理念の素質を照らし出しながら、常に「境界」をめぐる問題をテクストの中に対象化し、問い続けていた。すでに述べてきたように、三者における「内」と「外」、「自」と「他」の間で生まれてきた問題意識は、アジアの連帯を強調しながら、領土的、あるいは文化的な「境界」を、たえず「外」へと拡張することによって、自己の膨脹を図る日本を頂点とした大東亜共栄圏の理念と距離をおきつつ、形成された思考によるものである。

檀一雄と中村地平は、それぞれ「満洲」と植民地台湾で「外地」を経験することによっ

て、その時代における「境界」の問題意識を作品に描き込んでいたが、「外地」の経験を有しない太宰は、「内地」にとどまりながら「外地」に語りかけていたのであった。三者におけるアジア体験は、「内」と「外」、「北」と「南」、あるいは「中央」と「周辺」という、それぞれ異なる「場」に由来するものではあるものの、当時において多くの日本語作家に共有されているものであると考えられる。本論文で取り上げているのは、「内地」の日本人作家による表現活動に限られているが、「内地」で日本語による創作活動を続けていた「外地」の表現者にとっては、宗主と隷属という構造そのものが「境界」の問題を内包しているものであり、「境界」というものはつねに彼らに付き纏う問題でもあった。多岐にわたる「境界」の表象が、近年「外地」の日本語文学研究においても注目されている中、一九三〇・四〇年代の東アジアという時空間における日本語文学を考察するにあたって、「境界」という概念がもつ意味と射程は極めて重要であると言える。